

# カーボンゼロ社会へ

## 長崎大学の挑戦

<11>

カーボンニュートラルな社会では、人々はどのような生き方、暮らし方をしているのでしょうか。例えば、産業革命以前の社会は、循環型社会が成り立っており、カーボンニュートラルな社会に近いかもしれませんが、今のように便利な世の中ではありません。

今を生きる世界中の人々が仮に日本人と同じ暮らしをした場合、環境に与える負荷は、本来地球が持つ再生力や廃棄物浄化力2・9個分と言われています。これは現代社会が膨大な量のエネルギーを使って生産と

廃棄物処理を行っているためであり、この過程では、多くの温室効果ガスが排出され、気候変動を起こすほどになっています。そこで、主要な温室効果ガスである二酸化炭素の排出量を抑制するため、長崎大学ではそれぞれの学部が研究を続けており、本連載では、これまで主に科学技術的な視点からその研究内



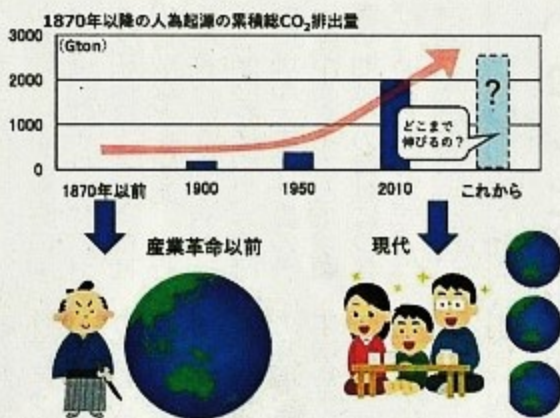
藤本登教授

教育学部長  
教授

藤本登

# 循環型社会へ人材育成

容を紹介してきました。しかし、気候変動問題は多様な環境問題や社会問題と密接につながっていることから、技術開発をするだけでなく、多くの市民や国



例：江戸の循環型社会  
カーボンニュートラルな時代  
(世界の人口20億人台)

世界の人々が日本人と同じ暮らしをした場合に必要資源の量は地球2.9個分  
※エコロジカルフットプリント値  
(世界の人口78億人)

と密接につながっていることから、技術開発をするだけでなく、多くの市民や国

同志が多種多様ないくつもの取り組みを効果的に、そして段階的・重層的に行う必要があります。

例えば、教科書や学校の授業のもとになっている今の学習指導要領のキヤッチフレーズは、「『生きる力』学びの、その先へ」です。ここには、未来が予測困難な時代の中でも、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、判断して行動できる人材の育成への決意が込められています。

そこで求められるのが、研究者、技術者だけではなく、循環型社会の重要性を理解し、その実現に資する生き方、暮らし方を意識する市民の育成と、そのような教育を推進できる教員の養成です。既に国内の学校では「教科の学び」と、それを総合して身近な問題について学ぶ「総合的な学習の時間」や具体的な課題解決を目指す「課題研究」が行われており、さらに、子どもの発達段階に応じた未

来志向の教育を担える教員の育成が始まっています。

例えば私の研究室では、エネルギー環境教育や中学校技術分野の授業研究、VRを活用して未来の電力需給システムを創造するための教材開発、放射線を含めたりスク認知やリスクマネジメントの研究などを行っています。教育を通して、子どもたちが、自ら新しい価値観を創造し、既存のものとおわせて判断・行動することで、周りを巻き込みカーボンニュートラルな社会が実現されることを願っています。(原則毎月第3木曜日付、地方版に掲載します)



本研究についての  
詳細はこちら

長崎大学教育学部では、総合大学としての強みである多様な教員の多様な経験・研究を生かしながら、このような新しい時代を子どもたちとともに創造できるように教員の養成を行っています。